



永野佑一取締役(写真左)と西村卓朗ゼネラルマネージャー。ともに市原市を盛り上げるアイデアを日々、練っている。

選手たちは上司や同僚のアドバイスをよく聞くといい。若くて体力があり、サッカーで協調性や犠牲的精神を身に付けた選手は介護現場に欠かせない存在になっている。

クラブは、高齢者の認知症の予防に一役買う上に、選手たちの働き口を用意。さらに、地域住民との距離を縮めようとさまざまな工夫をしている。現在、建設中のクラ

どが完備したクラブハウスも出来上がる。来年のフルオープンに向けて、着々と準備を進めている。

サポーター目線で交流スペースを設置

老人ホームの隣にサッカー施設を構えることによって、どんなメリットがもたらされるのか。それは、若い労働力を求める福祉の現場と、働きたがら高いレベルを目指してサッカーに取り組みたいVONDS市原の選手とのニーズが合致することだ。現在、

VONDS市原では16人の選手がグリーンホームを含む市内の福祉施設で働いており、そのうち14人は介護士として入居者と接している。

選手が仕事とサッカーの二つに情熱を持って取り組むことによって、単に介護の現場を離れてしまうことへの抑止力にもなっている。近年、福祉の現場では早期離職者の問題が深刻化しているが、クラブと老人ホームが協力することで、一定の効果も出始めている。また、選手たちが正職員として雇用してもらえ、安心して仕事やサッカーに打ち込むことができるのもメリットの一つだ。

選手たちは上司や同僚のアドバイスをよく聞くといい。若くて体力があり、サッカーで協調性や犠牲的精神を身に付けた選手は介護現場に欠かせない存在になっている。

クラブは、高齢者の認知症の予防に一役買う上に、選手たちの働き口を用意。さらに、地域住民との距離を縮めようとさまざまな工夫をしている。現在、建設中のクラ

「クラブの株主がみんな地元の人か企業だったら、クラブも移転のしようがなくなる。それどころか、このクラブは、自分たちと地元の企業で成り立っている」と自慢できる。そう思ってもらいたいにも、グリーンパークにあらゆる世代の人を集めたい。小中学生、VONDSの選手たち、施設の中で仕事をする40代、50代の人たち、そして老人施設に入所する高齢者。全ての年齢層の人々を呼んで、社

施設概要

〒290-0167 千葉県市原市喜多890-1
tel/fax 0436-62-0012
<主な施設> 天然芝グラウンド×1面、人工芝グラウンド1面(夜間照明有)、クラブハウス(12月に完成予定)、駐車場有
<アクセス> JR内房線「浜野」駅東口からロングウッドステーション行きバスで約25分「萩作入口」下車徒歩5分
京成千原線「ちはら台」駅からロングウッドステーション行きバスで約25分「萩作入口」下車徒歩5分



施設づくりの事例紹介

老人ホームの隣で抱く地域活性化の野望

VONDS市原は、老人ホームの隣にサッカー施設をつくったユニークなクラブだ。今回の取り組みはどのような経緯で進められたのか。クラブが描く青写真とは。

VONDS市原グリーンパークの完成予想図(VONDS市原提供)

老人の認知症予防には子どもの存在が効果的

Jリーグが誕生した1991年から各クラブが精力的に取り組むテーマの一つに、「地域に根ざしたクラブづくり」がある。千葉原市原市に拠点を置くVONDS市原(関東サッカーリーグ1部)もサッカーで地域を盛り上げようとしているクラブだ。しかし、その手法は従来のスポーツクラブと一線を画する。特別養護老人ホーム「緑祐の郷・グリーンホーム」の隣にクラブの拠点となる「VONDS市原グリーンパーク」を構え、そこから地域の輪を広げようとするさまざまな取り組みを進めている。

この取り組みに携わっている人物の一人が、VONDS市原の永野佑一取締役だ。もともと循環器の専門医で、現在は医療法人社団 緑祐会(永野病院、加茂診断所、介護老人保健施設 梅香苑)や社会福祉法人 市原うぐいす会(特別養護老人ホーム)の理事長を務める。海外で複数のホテルや医療クリニックを経営した経験も持つ。

永野氏はかつて、ジェフユナイテッド市原(現ジェフユナイテッド市原・千葉)のサポーターだった。Jリーグが開幕した93年に市原市がスポーツ健康都市宣言を決議、Jリーグによる地域の活性化に地元機運が高まっていた。永野氏もジェフのサポーターとして、足繁くスタジアムに通つ

ていた。だが、クラブが09年に市原市から千葉市に本拠地を移したのを境に、永野氏が試合を観戦する回数は減っていった。サッカーへの情熱が冷めたわけではないが、「もう一度、市原市にJリーグを目指すチームをつくりたい」と思うようになった。そして、医療に携わった経験や老人介護施設を経営する立場を生かし、サッカーと高齢者が結び付いた事業を始めようと思いついた。それがVONDS市原とグリーンホーム、グリーンパークの運営だ。

「昔から認知症予防には子どもと接することが効果的と言われてい



た。子どもたちが遊ぶ姿を見ながらお年寄りが散歩するような環境をつくるには何が必要かと考えた結果、老人ホームとサッカークラブを同じ敷地につくれば良いと思いついた(永野氏)

2010年から土地を探し始め、1年余りたつたところ、市原市喜多によく理想の場所を見つけた。今年3月には、およそ2万4千坪の広大な敷地に老人施設・グリーンホームをオープン。その1カ月後にはサッカーグラウンド2面(天然芝と人工芝)を完成させ、今年12月には選手たちのロッカールームやクラブ事務所な

ゆくゆくは多世代 同じ場所に集めたい

テニスやフットサルができる屋内練習場やジムの設置をはじめ、VONDS市原は12月にグリーンパークが完成した後も、サッカー施設への投資を続ける構えだという。老人ホームとサッカー施設の規模が大きくなれば、そこに人が集まる。人が集まれば地域のコミュニティが生まれ、サッカークラブが町おこしに貢献できる。

老人ホームとサッカークラブの共存は、地方が抱える少子高齢化、過疎化といった課題に立ち向かうことにつながる。永野氏は、企業の経営的判断で自らが愛するクラブが地元を離れるのを身近で体験した。当時はそれも仕方ないと思ったが、いまは違う。クラブが本当に地域に根ざそうとしていくのなら、異なるアプローチをすべきだと考えている。

「クラブの株主がみんな地元の人か企業だったら、クラブも移転のしようがなくなる。それどころか、このクラブは、自分たちと地元の企業で成り立っている」と自慢できる。そう思ってもらいたいにも、グリーンパークにあらゆる世代の人を集めたい。小中学生、VONDSの選手たち、施設の中で仕事をする40代、50代の人たち、そして老人施設に入所する高齢者。全ての年齢層の人々を呼んで、社